

平成26年度 三重大学教育学部附属中学校 自己評価書・学校関係者評価書

評価項目	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点	
教育研究	公開研究会	<p>「ともに学びともに高めあう」教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒が主体となった授業づくりを行うことにより、学びに対する意欲を向上させ、学力向上を図る。 個々の生徒が互いにつながりあい、「ともに学びともに高めあう」ことへの取り組みを通して、教科の学びの本質に迫る授業を創造する。 教育学部との緊密な連携のもとに、校内研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の研究に基づいた研究のうち、特段、それぞれの教師が力を入れていきたいと考えるテーマについて明確にするとともに、その進捗状況を研究会で点検する。 各教科において研究授業を行い、全員で授業研究を行う。 校内公開研究会、事前研究等を通じて、授業研究を推進する。 サイボーズやムードルなどのITを活用して、情報共有を図る。 三重大学FD委員会への積極的な参加を通じて、本校の研究課題、各教科における教材研究の成果についてアドバイスを得る。 公開研究会において、研究成果を公表するとともに、参観者との協議により、本校の今後の研究に資する。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマおよびサブテーマにそって、どのような資質・能力を、単元の目標や課題および活動の設定の中に埋め込むかということについて、提案性のある授業を公開することができた。 教科によって「資質・能力」の捉え方に若干の違いがあり、特に何を焦点化するべきかについての課題を残した。 ムードルの活用も一定の成果があったが、情報交換・共有のツールとしてさらに活用方法を考える余地がある。 学部および附属学校との連携をさらに強めつつ研究を進める必要がある。 校内の授業公開によって、各教員の授業力向上に資することができた。ただし、もっと授業について見あったり、話し合ったりする場があつてよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 全員が授業を公開し、検討会を持つことができたことにより、教科に関わらずに授業を見る目を持てるようになってきたり、意見を交換する中で授業への見識を深めることができた。 校内研究会や公開研の講師として文科省の調査官を招いたことで、次期指導要領への改訂作業の中で何が中心的な課題となっているかを知ることができた。また、本校の取組の方向性についても確認することができた。 研究の方向性がはっきりするまでに時間がかかり、漠然とした部分を持ちながらの公開研となった。ただし、これからの研究の方向付けはできたと感じている。 研究の評価、生徒の変化を捉える手段などについて、それらを確立できなかった。 授業力向上や、研究の深化という点で言えば、授業公開や検討会もまだ少ない。全体での話し合いによって共通理解を図ること不足していた。 地域の先生方にもっと参加してもらえるような情報発信やつながりづくりができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 個を伸ばし、集団を高める、さらに個を伸ばす（人の意見を聞き、自分の考えや意見を持つ）というスパイラルを念頭に置き、教育目標の推進に取り組みたい。 公開授業は、生徒の多様な考えを引き出すなどの授業もおこなわれ、成果があつたと思う。日曜日公開授業でも、附属の授業が観たい、参考にしたいなど、多幸の先生にとって、先進的で魅力のある授業になるよう日頃から取り組んでいただくことを望みます。そのために、ひとりひとりの教師の力量を高めていただきたい。 提案性のある公開研究会として意欲的に取り組まれ、県下の市町教育委員会、公立中学校などから強い関心と幅広い評価があつたと聞いています。参加したいという超えもいくつか聴きました。参加者が少ないのであれば、その原因を明らかにしておくが必要かと思えます。 附属中学校の研究が県下の市町教育委員会や公立中学校の要望を踏まえること、開かれた参加型の共に進める研究会になればと思います。 大学との連携、指導支援をさらに幅広く系統的にいただいても良いのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ①研究の方向性を明確にし、早い段階からの共通認識を図る。 ②校内公開授業の機会を増やし、授業のあり方を具体的に探る ③大学との連携を強化していく。 ・授業研究での連携 共同研究の実施、指導助言を積極的にいただく ・ユネスコ、FCSでの連携 大学訪問や出張授業等
	日々の研究	<p>学習指導要領の趣旨に基づいた教育の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> 文部科学省や県教育委員会が主催する各種講習会・説明会、県内外を問わず先進的实践を行っている学校等への視察を積極的に進めるとともに、その成果を校内で還流し、喫緊の課題、先行研究等について共通理解を図る。 教育実習の取り組みや、外部からの研修会講師招聘の要請に応えることで、教職員の資質の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 県総合教育センターの初任者研修における、必修研修(授業公開と教科別研究会)の1日を担ったり、選択研修(教科別学校訪問研究会)の指導助言者を務めたりして、教職員の資質向上を図る。また、県総合教育センターの改善指導者研修会の会場校として研修会を開催した。 文部科学省や県教育委員会の主催する各種研修会・講習会へ参加した。 県内小中学校、市町教委、県内各種研究会からの要請に対し、講師を引き受け、教職員の資質向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 初任者研修等とリンクして自らの研究の機会とすることができたが、事前の指導案検討などにさらに注力すべき余地がある。 文部科学省や県教委の主催する研修会、指導主事等連絡会議で研修できたことは附属教員としての見識をふかめることになった。ただし、それを本校の研究活動とどのようにつなげるかという視点をもって今後取り組む必要がある。 教科部会を用いた日常的な研究活動がなされたが、こうした活動に用いる時間がまだ少ない点が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導要領の改訂をにらみつつ、今後どのような教育活動を作っていくべきかについて、一定の成果はあり、教員の知見も深まった。授業力の向上についても様々な機会をとらえて取り組み、公開研究会の参加者からの評価も概ね良好であった。 上記のような成果はありつつも、次期の学習指導要領の方向性への理解をさらに深める必要がある。また、それを実現していくための、さらなる授業力の向上。 附属中学校の果たすべき役割を考えた場合の、県教委との連携の必要性。 教員の自主的な研修が少ない状況がある。自ら学び、考え、実践する自主性を高める必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 初任者研修や教科研など、指導的な役割を積極的に果たしていただいているが、さらに幅広く教職員の資質の向上に寄与して欲しい。 先生方にとっても、附属が「ともに学び高め合う」場となりますようにしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ①職員一人ひとりが目的意識をしっかりと持ち、授業研究や指導法について研修すると共に、職員間での共有の場を増やす
学習指導	少人数指導	<p>少人数学習の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 英語科において少人数学習を取り入れ、それぞれの生徒に適切なきめ細やかな指導を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語科にあつては、1年生で少人数学習を取り入れ、中学校で初めて学ぶ英語科について、中1ギャップの視点で支援し、小学校外国語活動とのなめらかな接続ができるようにする。1クラス36名を教室と国際理解教室の2つのグループに分け、それぞれ英文法・新出語句を中心とした授業と教科書本文を中心とした授業を行う。 数学科では、T2が生徒の理解度を把握したり、つまづいている生徒への個別指導を行ったりするだけでなく、T1とT2のやりとりを生徒に聞かせたり、T2が生徒に発問を投げかけたりすることで、授業の活性化を心がけた。また、T1が提示した問題を、T2がわざと誤った解き方を板書し、「どこに誤りがあるか。なぜそのような誤りが生じたか。」を考えさせ、つまづきの原因を明らかにさせるようにした。 	<p>英語科</p> <ul style="list-style-type: none"> 20人の2つに分け、違った内容の授業を行っている。高等学校で実施されている方式に近い形を取っている。 教室では、主に新出単語の発音・意味の理解、文法説明、プリント演習、グループ発表を行った。国際理解教室では、デジタルテキストを使用し、教科書内容の導入動画、フラッシュカード、本文の読解説明等で授業は進められている。生徒たちは、交互に教室と国際理解教室を移動し、全員が同様の内容を受けることができるシステムになっている。 授業では、英語でのスキット(短い英語劇)を全員に実施した。少人数であったおかげで、一人ひとりにきめ細かい指導を行い、基礎学力の低い生徒も、発表には積極的に取り組んでいた。 <p>数学科</p> <ul style="list-style-type: none"> 2人の教師が生徒の理解度を把握できたので、つまづいている生徒への個別指導がいねいに行うことができた。また、ペアによる教え合いに教師が関わったり、2人の教師のやりとりを意図的に行ったりすることで、授業が活性化され、わからないことを自由に尋ねたり、自分の考えや疑問・発見等を全体に出したりする雰囲気が生まれた。 	<p>英語科</p> <ul style="list-style-type: none"> 少人数教育を行うことによって、より多くの生徒が授業で発言することができ、わからない生徒にも時間をかけて指導することができた。全員が発表する時に時間が短縮でき、授業前半で全員の発表を行った後、別の内容を指導する余裕があつた。 2人の教師が考えを出し合つて、内容が充実した。 少人数教育についてアンケート調査を実施し、その結果ほとんどの生徒たちが少人数教育について肯定的な意見を持っていることがわかつた。 少人数教育で身につけた英語への意欲は、学年が進んでも生徒たちの中に残ると思われる。 2人の教師がそれぞれの教室で別々の内容を指導するために進度調整や内容確認をする必要があつた。 <p>数学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアによる話し合い・教え合いへの教師の関わり方や、グループ活動への関わり方を工夫し、「わかつた」「できた」等の達成感・満足感を1人でも多くの生徒に味わわせる指導が不十分であつた。 T1、T2のやりとりの場面を工夫し、生徒が興味をもって主体的に取り組む授業という点では、まだまだ改善の余地がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 少人数指導の充実は、ひとりひとりの生徒の学習状況にきめ細やかに対応するという意味でも大切なことだと思います。生徒が望む少人数の形態というのはどのよふんなものでしょうか。生徒の声を聴いてみるのは、いかがでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ①少人数教育の強み弱みを十分検証しないままであることを踏まえ、目の前の生徒に必要な力をつけるためにどのような実践が必要かを問い直していく
	学習環境の整備	<p>聴きあい学びあう関わり方の醸成</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ともに高め合う学び」を継続して推進するため、生徒一人ひとりにとって、質の高い学びが実現できる学習環境を整える。 各種客観調査の導入とそれに基づいたPDCAサイクルの構築及び改善項目の精査 QU調査、NRT調査、全国学力・学習状況調査を行い、生徒の実態把握とその改善項目の実践を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 4人班を基本とした学習基盤づくり。 QU調査をもとにした学級集団づくり。 学級における構成的グループエンカウンターによる人間関係づくり。 全国学力・学習状況調査の結果を分析し、教科の内容や、生活習慣をはじめとした学習状況を、それぞれ把握し、改善する。 新学習指導要領に準拠したシステムづくりを進めるとともに、新学習指導要領の内容把握にかかる学習会の機会を増やす。 「動く！！附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な取組のおおよそを実施することができた。特に、グループ学習の取り入れ方については、教師間でしっかり共通理解ができた。また、QU調査については、年2回実施をし、結果の分析や次の手立てに結びつけることができた。 「動く！！附中生徒」を意識し、全職員が動くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね安心安全の学習環境を作れたように思う。生徒指導上も、学級づくりも全職員の共通理解のもと、活動できた。 学力調査の分析等は、該当学年の扱いにとどまり、全職員のものとならなかったことが、課題である。 環境整備のために、教師自らが研修・研究に取り組む姿勢が少しづつではあるが見おられた反面、現状改善をしていこうという意欲に欠ける面もあつた。 	<ul style="list-style-type: none"> Q-U調査を踏まえた生徒の実態把握を大切にされていますが、意識の共有と活用、共通理解などの課題を乗り越えて多くの成果を得ているの思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ①Q-Uデータ結果を基に生徒理解や集団の様子は、把握できていると思われる。昨年度と同様「意図的に仕掛ける」ことで、教師から生徒に対して、どんな方法が有効かを検証すべきである。

教育実習	教員個々の資質向上 ・教育実習の指導を通して教員個々の指導力向上の機会と捉える。 生徒の学習の機会 ・教育実習を通して、実習生と生徒の触れ合いを互いに学ぶ機会とする。	・教育実習生の指導を通して、授業の在り方を見直す機会とするとともに、教員の資質向上に役立てる。 ・新学習指導要領の言語活動の充実について、教育実習生の指導の機会を利用して、精査する。 ・実習生と生徒の触れ合う機会と捉え、生徒のコミュニケーション力等について観察・指導する。	・各クラス、教科で指導できていた。 ・2, 4w実習中、課題はあるものの、全職員で解決し、指導することができた。 ・ほとんどの実習生は、前向きに取り組んでいる。	・実習室のプリンターを増設できた。 ・実習生の持つ課題を把握し、助言・指導ができた。 ・一部ではあるが、前向きに実習に取り組めない学生がおり、田の実習生との落差を縮める工夫が必要である。	・実習生への厳しい指導も大切ですが、先生方自身の研修の場でもと言うとらえ方は、素晴らしいと思う。	①実習指導を通して、教職員の資質が向上できるよう、授業をはじめとする学校生活全般を通しての教師の意識や共通理解を実践し、実習生にも教えていく必要がある。
キャリア教育	教科学習を通じたキャリア教育 学校行事を通じたキャリア教育 「先輩から学ぶ」	・あらゆる教科教育の中で、生徒個々のキャリア形成を図る。 ・行事の中で自主的に生徒が企画し、活動する場面を設定する。 ・社会見学や修学旅行の取組を通して、地元の人々との交流や平和学習、資料から、人権や平和などに寄与する姿勢をもつことにより、生徒個々のキャリア形成を図る。 ・3年間を見通して、生徒が進路選択に至るまでの自分を見つめ直す機会を設定する。 ・本校のキャリア教育に関する保護者啓発を図る。	・キャリア教育講演会を実施し、社会で活躍されるOGの姿から働くことの意義や社会に貢献することとはどういうことかを考えることができた。 ・各学年にて「職業調べ」「高校調べ」などを実施したり、さまざまな学年行事を通して、学んだことを学年集会や文化祭で発表したり、壁新聞を作成したりすることができた。 ・全学年でキャリアカウンセリング（教育相談）を行うことができた。	・各学年の発達状況に応じた進路学習を行うことができた。 ・キャリアカウンセリング、キャリア教育講演会を実施することができた。 ・本校のキャリア教育に関する保護者啓発が十分にできなかった。 ・地域人材の積極的な活用 ・3年間を見通したカリキュラムの構築	・昨年を書きましたが、附属ならではのキャリア教育が必要かと思えます全国の附属ではどのような実践がなされているのでしょうか。参考例はありませんか。一定の枠の中の結論に誘導してしまっていないかの確認を。	①附属のキャリア教育を立ち上げなければいけない。そのため、ユネスコESDとも連携しながら、実践していきたい。 ②ユニークな発想視点を引き出せる工夫をしていきたい。
生徒指導	集団の育成と活気ある学級づくり 生活指導体制の充実 学習習慣の確立と授業の充実 諸活動への取り組みと充実 教育相談体制の充実 規範意識の醸成	・学級での係活動や班活動の充実を図り、生徒一人ひとりの活動の場を設ける。 ・家庭との連携を密にし、教師・生徒・保護者との相互の信頼関係の構築や共通理解に努める。 ・全職員が共通理解を深める機会を定期的に設け、統一した指導を進める。 ・生徒指導部会を定期的に関き、各指導部の情報交換や指導の徹底を図る。 ・基本的な生活習慣(礼儀、身なり、けじめ、時間など)の育成を図るとともに、規範意識を高める指導に取り組む。 ・養護教諭、スクールカウンセラーとの連携を密にして指導の徹底を図る。 ・学習規律の定着を図る。 ・生徒会執行部、生徒議会との連携を密にし、活動の活性化を図る。	・全職員であったことができていた。下駄箱の観察等協力できている朝の挨拶から授業間の見まもり当番が全職員で取り組む体制が整備された。 ・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制を構築でき、全体で共有する体制になっている。 ・学年団を中心として、問題行動については協働して解決できている。 ・学年、学校全体で共有や相談がしやすい雰囲気を作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持てた。統一しようという意識が教職員の中に見られる。	・共通理解はされているが、共通実践はまだまだである。 ・職員会などで情報共有がはかられており、昇降口指導は全教職員で取り組むことができた。ただし、日常的な他学年の生徒の様子はわからないことが多く、情報共有の難しさを感じる。 ・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制になっている。全体で共有する体制になっている。 ・生徒指導担当や学年主任、管理職の方に相談できる環境があり、大変な難かった。 ・悩みを抱える生徒に対して改善方向へむける指導を行えなかった。 ・対処はできているが、生活指導以外の先生が他学年などの問題行動を知る機会が少ないため、共通理解しにくい。 ・マニュアル通りでは解決の糸口を見出すことはできない事例が多いが、個々の判断での行動ではなく、協働の体制で対処できるよう努めていきたい。 ・学年、学校全体で共有や相談がしやすい雰囲気が作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持てた。 ・統一しようという意識が教職員の中に見られる。 ・なかなか時間あわせが難しいこともあるが、働きかけが不十分であった。SCとの話し合いの機会があるのでよい。普段、もっとこちらから話しに行けるようにしたい。 ・スクールカウンセラーとの接点が少ない。(以前は職員室に	・授業参観や卒業式における生徒の姿からは、落ち着いて学習に向かっている、よく考えようとしている、より良い答えを目指そうとしているなど、附中生としての誇り、自身がうかがえませんでした。生徒の高い目標、志を踏まえた指導が大切かと思えます。生徒や保護者との日頃の地道な関わりが、信頼関係を生み、意思の疎通が図れたり、問題行動うい未然に防ぐ環境を作るものと考えます。指導や見張りの方法の前に、人と人のつながりの原点に返り、取り組むことが大事だと思います。また、報告連絡相談のできる環境を一層推進してください。	①附属中の生徒という自信と誇り、愛校心、自分たちの学校をどんな学校にしたいのかという強い気持ちを持たせる指導を優先する生徒指導のあり方を構築する。 ②規範意識をしっかり持ち、自分で考え行動できる生徒の育成に力点を置きたい。
人権教育	人権学習の推進 ・「ともに高め合う学び」や人権学習を通して、自分自身を大切にし、周りも大切にできる生徒を育成する。 ・人権尊重の精神に立った学校づくりに取り組むために、「人権が尊重される学習活動づくり」、「人権が尊重される人間関係づくり」、「人権が尊重される環境づくり」の3つの視点で取り組む。	・人権教育指導計画を見直し、生徒の発達段階に応じた系統的な人権学習の展開を図る。 ・仲間づくりを通して、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる生徒を育成する。 ・全教科・全領域において、「共同的な学び」を軸に人権を大切に学習活動を展開する。 ・人権教育講演会を開催し、現状と課題、目指す目標と具体的な取組を共通理解し、道徳の授業や総合的な学習の時間だけで人権教育に取り組むのではなく、教科指導、特別活動、教科外活動、生徒指導、学級経営等、全ての活動で取り組む。 ・「いじめは許さない」取り組みを進める。 ・心を育てる取り組みを通して、自尊感情を培い、他人を大切に思える気持ち(見取り・気配)	生徒 人権講演会参加(露の慎治さん) 教師 橋北中校区人権活動実践交流会参加・津人教支部研究大会参加 ・現行のまま、人権活動を継承していく。 ・先生方には、津人教等様々な催し物に参加してもらいました。今後も協力をお願いしたいと思います。 ・本年度も人権講演会を開催しました。次年度も開催をしていく予定。少しずつの人権学習に対する取り組みが地道な人権意識の向上に結びつくものと信じている。	・「人権学習」の取組は弱い。意識の改善までいっているのかと思うと疑問である。 ・学年によって人権教育の実践に差が出ている気がする。普段の授業や生徒との関わりの中で、人権について考えさせるような言葉がけが心がけた。 ・仲間づくりに関しては、授業、休み時間を通して生徒の様子から指導を行っているが、生徒の自発的な姿勢に働きかけることが薄かった。まず我々が職場の仲間を思いやりたい。	・人権教育こそ身近な、地道な、粘り強い取り組みが必要だと思います。外部との関係も大切ですが、附属中にとって一番大切なテーマ、やり方を自信を持って取り組んで欲しい。	①あらゆる問題に含まれる人権感覚を人として、しっかりとらえるための機会(講話・体験学習)を増やす。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒に支援の在り方について検討する。 特別な支援の推進に必要な条件整備を行う。	・保護者の了解のもと、支援計画や指導計画の作成に取り組む。 ・教科の学習において、特別な支援を要する生徒への支援体制を整える。 ・学習支援ボランティアを活用した支援体制の推進に取り組む。	・月1回であったが、情報を共有することができた。	・生徒への指導計画を作成により、共通理解をもって指導していくことができた。 ・四附間で支援・指導計画表の様式を持ち寄ることにより、継続性のある支援への取り組みを進めることができた。 ・支援対象生徒の洗い出しが必要。 ・生徒の困り感の共有が必要になってくる。 ・担当者以外、各学年の特別支援を必要とする生徒の様子が分からない。 ・保護者との共通理解を深めるツールとしての活用や指導計画の更新はできなかった。	・授業参観や卒業式における生徒の姿からは、落ち着いて学習に向かっている、よく考えようとしている、より良い答えを目指そうとしているなど、附中生としての誇り、自身がうかがえませんでした。生徒の高い目標、志を踏まえた指導が大切かと思えます。 ・附属中の特別支援教育の実際がよく分かりませんが、一般公立学校では今まで気付かなかった支援が必要な生徒、制度発達障害の生徒への対応が課題になっています。学校全体での取組	①全体の中に埋もれてしまい、見失いがちになる生徒をしっかり把握し、どういった支援が必要かを確認し、支援していくシステムの構築が必要。
国際理解教育	・天津市実験中学との交流 ・留学生を招聘しての国際理解学習 ・学校行事や総合の時間を通して国際理解学習 ・国際言語である英語の習得をめざしたイングリッシュキャンプ(今年度は、希望者のみ)の実施	・天津市実験中学と交流を行うことで、生徒の視野を広げ、国際社会で活躍していく人材としての意欲を育む。 ・留学生等を招聘し、交流学習をすることで、異文化理解を深め、グローバルな視野を広めるきっかけとする。 ・調べ学習や社会見学への取り組みを通して、外国人の人権や共生について学習をする。 ・イングリッシュキャンプの実施により、コミュニケーション能力と英語学習への意欲向上をめざす。 ・「動く!!附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。	・天津市実験中学の生徒と教員の来校を受け、異文化を理解し、国際協調の大切さを考える機会をもつことができた。 ・中国やマダガスカルからの留学生を招いて、他国の文化に親しみ、国際社会で互いに理解し合うことの大切さを学ぶことができた。 ・イングリッシュキャンプを実施し、国際言語である英語学習への意欲を高めるきっかけとすることができた。 ・文化祭では、希望者を中心にスピーチやイングリッシュキャンプの報告、英語の歌などの発表をすることができた。 ・天津市実験中学の教員と、環境教育についての意見交流をすることができた。	・天津市実験中学との交流に向けて、調べ学習や留学生との事前学習会を行い、中国の伝統や文化について関心や理解を深めることができた。また、実験中学の生徒との交流を通して、相互理解・協働の重要性を学ぶことができた。その他、天津側から本校の環境教育の実践を教えてほしいとの依頼を受け、取り組みの紹介や情報提供をすることができた。今後、教職員間でさまざまな実践交流をし、学びあえる場が広がっていけばと思われる。 ・各学年で学校行事や教科との関連の下、国際理解学習を進めることができた。 ・グローバル人材の育成をめざした取組の1つとして、本年度イングリッシュキャンプを開催することができた。 ・中央廊下に国際交流の掲示物を展示するコーナーを設け、英字新聞やドイツからの便り、天津市実験中学との交流時の写真など、生徒だけでなく来校者、保護者にも情報発信・環流をすることができた。 ・天津市実験中学との交流が単発的なものとなっているため、年間を通じた継続的な交流を試みていきたい。 ・留学生をもっと活用していきたい。	・天津市の中学校との交流を通して、具体的な国際理解教育を進められていますが、是非続けてほしいと思います。様々な事務や準備が必要で、先生方の負担が大きくなると思いますが、保護者や一般の方のサポート体制の工夫など、さらにダイナミックに展開させて欲しいものと思います。校内の風景や掲示物からは、あまり外国語や国際色が感じられない。	①次年度は、天津実験中学校へ本校生徒が訪問する年であるため、学校間レベル、生徒レベルでの心豊かな友好関係が築けるよう事前学習を始め、手立てをとっていくと共に、交流が一部の生徒のものにならないようにする。 ②天津実験中学校に限らず、英語圏と学校との交流や事項でできる英語力向上の手立てを考える。

教育相談	日々の学校生活における生徒の悩みを聞き取るにより、生徒理解を進める 不登校となっている生徒への対応を進めるとともに、不登校を未然に防ぐ取組を進める。	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談を学期に一度行う。 ・学校に来ることだけを目標にするのではなく、個々にあった対応を考えていく。 ・不登校生徒宅への家庭訪問を定期的に行い、保護者、本人との連携を密にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年2回のhyperQ-Uを実施し、学級における悩みをかけた生徒の把握に努めることができた。 ・教育相談といじめアンケートの結果の聞き取りを実施し、生徒指導との連携を取ることができた。 ・不登校生徒に対しては担任による家庭訪問を定期的に行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の異動があっても継続的にhyperQ-Uの結果分析を続けることで、結果に対するアプローチの方法が少しずつ取れるようになってきた。 ・学級担任、副担任を中心に学年団が連絡を取り合って、対象生徒に関わる体制ができています。 ・hyperQ-Uの結果を、学級における悩みを抱えた生徒の把握と改善に生かす取り組みを一層進めていくことが必要。 ・教育相談期間にしか生徒とじっくり話をする機会が持てていないことが多く、日頃からの生徒理解が観察法に頼る状況になっている。 ・不登校生徒や悩みを抱えた生徒・保護者とSCを積極的につなぐことが必要であり、そのための方策として、教育相談担当が担任・学年団にはたらしかけをしていくことが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談のニーズに対応する様々な取組がなされていると伺いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ①いじめアンケートと教育相談の連動 ②生徒をしっかりと見守る姿勢の強化
生徒会	生徒会や学年・クラスのリーダーを中心に、生徒の企画運営力を育て、リーダー性が発揮できるように指導する。各委員会活動を活性化させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に活動部会を行い、各活動部の活性化を図る。 ・体育祭や文化祭などで、生徒が主体的に企画、運営をする。 ・いじめ根絶に向けた活動を充実する。 ・ユネスコや赤十字の団体に関わることににより、それぞれの活動に積極的に参加する。 ・「動く！！附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。（附中smile-session等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度よりも工夫して、主体的に取り組むことができています。体育祭、文化祭等の行事が生徒会を中心として、円滑に運営されている。特に文化祭では、生徒会独自の発表がICTを用いて実施された。 ・縦割り活動によって、「附属全体」という意識が高くなった。 ・生徒が行事に積極的に取り組んでいるスマイルセッションなどで、新しい取り組みがあった。内容は、生徒たちの意見が尊重されたもので、スマイルセッションの定期的な開催や縦割りの活動を多く取り入れ、縦割りの意識が生徒の中に出てきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は縦のつながりを通年を通して意識することによって、【スマイルセッション、体育祭等】学年の枠を越えた交流が多く見られるようになった。 ・挨拶運動を毎日8：05～8：20の間行うことによって、生徒間つながりであったりコミュニケーション作りが活発に行われた。 ・スマイルセッション、学校祭縦割りの工夫等担当の先生方には大変お世話になっているが、生徒主体でというスタンスは今後も維持されるべきである。 ・活動部は、取組の内容を工夫し、更に生徒の自主的な活動を促していけるとよい。十分に工夫されており、意義が感じられるものであるが、新しくつくった分は旧来からのものを廃止・縮小しないと、教師も生徒もこなすだけで大変になっていくことを危惧している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スマイルセッションなど生徒が主体的に取り組める企画を計画され、それがうまく生徒に受け止められていると思います。一つ一つの取組の達成感が、生徒を成長させるのだと思います。 ・年々レベルアップしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①生徒が主体的に動けるような教育環境を整備する。 ②生徒会執行部だけが、動くのではなく、生徒ひとりひとりが活動できた実感を持てるようにしたい。 ③前例主義を求めない引き継ぎの工夫。
教育環境づくり	校内外の美化に努めることにより、教育環境を整える。 環境教育を実施することにより、生徒の環境浄化に対する意識付けを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーン大作戦を実施することにより、生徒とともに教育環境作りを行う。 ・体育祭前の除草等の作業を通して、保護者と生徒・教職員が一体となった環境作りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーン作戦（4/29）（9/6）を実施。生徒は、多数参加できたが、保護者の参加数が減った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーン作戦は、いずれも生徒や教師がしっかりと取り組むことができた。保護者の参加が少なくなっている点を改善したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当初は育友会主催行事として始まり（春のみ）、「地域とのつながり」や「保護者が学校に足を運ぶ」に軸足があったもの。 長く継続されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①保護者には、単なる奉仕活動と感じさせない工夫が必要。 ②育友会の積極的な関わりを期待。
開かれた学校づくり	学校評議員会（学校関係者評価委員会兼任）を開催し、学校自己評価・関係者評価の活動を通して、学校運営を見直す。 ホームページや学校通信を通して、保護者や地域の人々に本校の様子を情報提供する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員会を年3回開催し、学校運営についての意見を集約する。 ・保護者や生徒に対して、学校教育に関するアンケートを実施し、学校運営に資する。 ・ホームページを充実したり、学校通信を配付したりすることを通して、学校の様子を情報提供する。 ・学校公開デーを各学期で開催し、学校を広く公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員会を（7/14、12/15、3/9）に実施、いろいろなご意見をいただいた。 ・生徒、保護者へのアンケートを実施した。結果は、附中通信で保護者に知らせた。 ・学校公開デーを開催し、開かれた学校作りを努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評議員の方に関係者評価をお願いすることにした。また、4附での学校評価委員会でも評価をいただいた。 ・アンケート結果は、前年度より若干ではあるが高評価をいただいている。しかし、教育内容の不徹底や保護者支援など、改善点も見られた。 ・学校公開デーへの参加は、1日フリー参加としていることから、教室への出入りがしにくいとの声をいただいた。改良が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域を持たない附属では、学校からの発信がカギになるかと思っています。保護者への発信はもちろんです。県下の市町教育委員会や公立中学校、マスメディアへの発信も考えられたいかがでしょうか。 ・生徒や保護者が学校教育推進の当事者であるという視点から、自分はどうに取り組んできたか、関わってきたかなどのアンケートをおこなうことにより意識の向上に役立つのではないかと思います。 ・「校区がない（広い）ため地域とのつながりが希薄」が特徴のため、一層積極的な工夫が必要。池田小学校事件の事案も思い出されるが、こどもたちの安全のためにも周辺地域の方々が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ホームページの充実 ②学校関係者評価委員会については、学校評議員委員会と兼任することとし、附属の他校種の評価は、それぞれにいただくこととする。 ③外から見れば附属は一つ。四附一体での取組が必要。防災・周辺掃除などを切り口にした。